

シェスタック博士の訪日を迎えて

(東大宇航研) 神戸 博太郎

ヤロスラフ・シェスタック博士はチェコスロバキアのプラハにあるチェコ科学アカデミー物理学研究所に所属する新進気鋭の熱科学者である。彼の人となりは、1974年ハンガリーのブタペストで第4回国際熱分析会議が開かれた折、その年のメトラー賞受賞者として紹介したことがある〔熱測定2, 22(1975)〕。彼は1971年スイスのダボスで開かれた第3回ICTAでも、無機化学の部での特別講演者として招待され、非定温反応速度論について述べたことがあり、そのとき32才であったから、若くして世界的に著名な人となったわけである。1976年7月、私がプラハを訪れたときには、いろいろと世話してくれたし、先日亡くなったインドのカークナバラ博士とともに自宅で歓迎してくれたことがある。1977年の京都のICTAの折には、ぜひ出席したいと言ってきて、ナホトカ航路の船の手配までしてやったが、結局許可が下りずに出席できなかった。その後も、毎年のようにぜひ日本にいきたいと言ってきていたのが、幸に本年は山田科学振興財団より渡航費の援助をして貰うことができ、また熱測定機器メーカー4社からも寄付を頂いて、招待することができた。

彼の仕事は、熱分析における反応解析の理論が有名であり、私も理論の方が得意な人だと思っていたが、現在の仕事はガラスおよび強磁性体の製造に関する技術の開発であり、実験技術、測定機器などについても強い関心を示したのは、むしろ意外であった。

5月19日より6月10日まで23日間精力的にあちこち訪問した。5大学(7学科・研究所)と4政府研究所、1会社工場を訪問し、東京で熱測定学会、京都で窯業協会主催の講演会で講演した。また、東大宇航研、三重大工学部では講演会が開かれ、筑波地区でも熱測定学会会員の集まりで講演した。講演の内容は、大体4つあり、一つは熱力学に基づく熱測定の基礎、第二は熱分析法の原理による分類、そして第三はガラスを中心とする転移の解析の実例、最後に非定温反応速度論であった。東京

で開かれた熱測定学会主催の講演会は、東大工学部5号館の講義室で開かれたが、あいにく天候が悪く、人の集まりが少なかった。内容はほぼ第二テーマと第三テーマの組み合わせであったが、かなり緊張してしゃべったように見受けられた。

1938年9月生れ、41才の若さである。飛行場へ迎えたときリュックサックをしょって現われたのには驚いたが、なかなかのスポーツマンで、チェコから派遣されて、ソ連のコーカサス山脈登山隊に加わったことがある登山家でもある。

6月1日にこちらの招待日程が終わった後、しばらく滞日して自由に歩き廻りたいと希望したので、帰国を延ばして、本人にまかせておいた。雨の降り始めの折であったが、富士山に頂上まであと100mのところまで登り、ヒッチハイクをし、寝袋で野宿を4泊し、鎌倉・日光なども歩き廻ったようである。

最後の晩に日本についてももっとも印象深いことは？との問に対して、人々が大へん穏かに振舞うことだ、といっていた。帰国したらチェコの物理学会誌に、日本の印象を400枚近くとった写真とともに寄稿するのだそうである。いつまでも、日本に抱いていた夢を忘れずにいてほしい。



(金閣寺にて)